

地底の神秘あぶくま洞

—奇跡の発見から50年を経て—



あぶくま洞管理事務所 所長 伊藤 敏男

〈はじめに〉

日本には多くの洞穴があり鍾乳洞も数多く点在しています。観光鍾乳洞は古くからその存在が知られていたり、信仰の地として古くから利用されている所が多くあります。

あぶくま洞のある田村市滝根町では三山（仙台平、中平、駒ガ鼻）にはカゴ（洞窟）があると古老からの言い伝えがありました。実際に仙台平には坂上田村麻呂が奥州に東征した際に、地元の豪族である大多鬼丸が戦いに敗れほろぼされた時、鬼穴という洞穴の「奈落の井戸」に財宝を隠したといわれておりました。鬼穴の存在は昔からわかっておりましたが、奈落の井戸の存在は確認されていませんでした。あぶくま洞発見後の調査で、奈落の井戸の存在も明らかにされ、井戸があぶくま洞と連結されていることも確認されました。各地には同じような伝説などがあり、実証された例も多く存在しますが、あぶくま洞の発見については石灰岩採掘中に偶然発見されており、あぶくま洞の発見により伝説が証明され洞穴の存在が明らかになったたいへんめずらしい鍾乳洞ではないかと思えます。

〈発見史〉

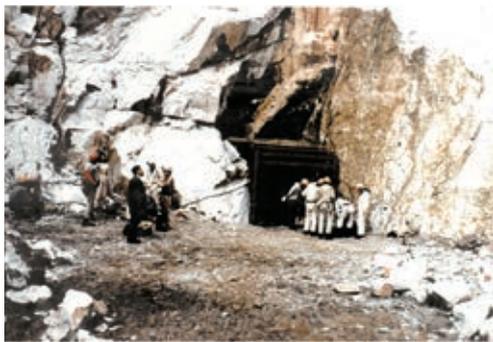
あぶくま洞のある福島県田村市滝根町には田村市指定の天然記念物であるあぶくま洞と、国指定の天然記念物である入水鍾乳洞の2つの観光鍾乳洞があります。この2つの鍾乳洞は阿武隈高原中部県立自然公園の中にあり、阿武隈高原の

最高峰である大滝根山（1,192m）西方に位置する滝根群層と呼ばれる石灰岩を主体とする地層に存在しています。田村市滝根町では大正3年ごろから石灰石の採掘がはじめられ、大正6年に磐越東線が開通したことで仙台平カルスト台地の本格的な石灰石採掘が始まり、採石や運搬には多くの労働者と牛馬が動員され過酷な労働環境の中、最盛期には年間41万トンの石灰岩を採掘しておりました。この採掘があぶくま洞の発見につながりました。当時あぶくま洞のある場所は釜山採掘場として住友セメント(株)（現住友大阪セメント(株)）がダイナマイトを使用した露天掘りで石灰岩を採掘しておりましたが、1969年（昭和44年）に石灰岩採掘終了に伴い、現場の整理作業の為に最後の発破作業をかけたのが、現在あぶくま洞がある10号鉱区であり、偶然に発見された穴が現在のあぶくま洞となっております。石灰岩の採掘はあぶくま洞発見の年に終了しましたが、その採掘跡に残された切羽である石灰岩の大岩壁は、いまでもあぶくま洞のシンボルとして見る人を圧倒しています。



石灰岩の整地している様子。（昭和44年頃）

発見は、地元の柳沼伝次郎氏によって洞窟が見つけられ、先崎三郎氏とともに最初の探検が行われました。発見された当初は深さ12mの縦穴と北東に60m、東西に15メートルの横穴であり小さな洞穴でした。翌年1970年3月に滝根町は日本大学探検部に調査を依頼しました。日本大学探検部はそれまで終点とされていた北東の60m地点で風が来る小さな風穴を発見し掘り進め現在の観光公開部の全容が明らかとなりました。



調査に入る日本大学探検部（昭和45年頃）

又、観光公開部最後の見どころである「月の世界」は、同年8月に町役場職員先崎定美氏により発見されました。その後も洞穴の調査測量、新支洞の探索は現在も続けられており、現在測量が終了している部分の総延長は4,218.3m（2021年現在）であり、観光洞としての一般公開部分が約600m、未公開部分が約3,600mとなっており、総延長は国内の鍾乳洞で11番目の長さです。

〈オープン〉

1969年（昭和44年）9月に発見された鍾乳洞は釜山鍾乳洞と呼ばれ、学術調査や見学ルートの整備などが行われました。又オープン前には釜山鍾乳洞の新名称の募集が広く行われ2,568通の応募があり、その中であぶくま洞の名称応募数が19通と最も多く、あぶくま洞の名称に昭和48年5月に決定し1973年（昭和48）6月1日に観光鍾乳洞としてオープンしました。当時の滝根町は福島県内で下か

ら2、3番目に貧しい町であり、又、石灰石採掘に関しては誘致企業や鉱業権業者等との訴訟問題も抱えており毎年赤字運営となっていました。すでに観光鍾乳洞として営業を開始していた入水鍾乳洞は年間6～7万人の入洞者であり、開発を担当した当時の町役場職員は全国のあらゆる鍾乳洞を視察し、又専門家から学術的価値についても指導いただき、あぶくま洞の価値に確信をもっていたのですが、オープン前の議会であぶくま洞の年間入洞者数を20万人と見込み予算を作成し提出したところ、そんなにお客様が来るわけがないと笑われたと話しております。その中でオープンしたあぶくま洞ですが、町役場職員の期待以上に昭和48年の入洞者数は47万2千人を記録し、昭和50年には100万7千人の入洞者を記録しました。当時、あぶくま洞は町営の施設であり入洞料は一般会計にも繰り出され中学校建設や町役場建設、道路の開発に利用されました。



洞口まで長蛇の列が続く様子（昭和48年頃）

〈現在のあぶくま洞〉

あぶくま洞の入洞者数は昭和50年の100万7千人をピークに昭和60年には59万3千人、平成10年には40万2千人、平成13年には30万9千人と年々減少しました。観光施設の多様化や高速道路の整備延長などが要因と考えられますが、当時のあぶくま洞は積極的なPR活動をほとんど行っていない典型的な待つだけの観光施設であり滝根町としても今後の運営に危機感を持ち始めておりました。

町では平成12年にコンサルタントに経営診断を依頼しその結果をもとに、年間入洞者数30万人維持を目標とし民間の手法での積極的な誘客と職員教育への取り組みを平成13年から開始し、平成13年からは運営を委託した第三セクターである滝根町観光振興公社へ民間から業務指導にあたる2名を委嘱し経営改善を図りました。私があぶくま洞に入社したのはこの時でした。あぶくま洞に営業課を新設し観光PRを積極的に行うため営業職での募集があり、民間の会社で営業職を行っていた私は、地元の観光地あぶくま洞と観光の営業というものにとっても興味がわき、即応募し入社しました。興味があり入社しましたが、物を売る営業と人を呼ぶ営業では勝手が違い誘客活動には苦労しましたが、数年後には年間36万人まで入洞者数を回復することができました。町で委嘱し業務指導に当たっていた2名からの指導やアドバイスなどが大変役立ちました。平成13年からの経営改善の成果としては営業課の創設、敷地内イベントの開催、県内外のイベント参加での観光PR、県内外観光関連施設との連携、職員の資質向上などが挙げられます。又当時の町長が発起人となりあぶくま洞ボランティアガイドの会を発足させ「甦れ、あぶくま洞！」をスローガンに来洞されたお客様のおもてなしの充実を町民をあげて図った結果、入洞者は持ちかえし平成22年までは継続して前後30万人の入洞者数で推移しました。

〈東日本大震災と原発事故〉

あぶくま洞は昭和48年オープン以来、四十数年間、年中無休で営業していましたが、平成23年の東日本大震災により初めての休業を経験しました。震災当日は雪が舞っており肌寒い平日であったため、入洞者が少なく地震が起きた時には洞内には2名の案内人と2組のお客様グループが見学をしていました。

地震時は大きな地鳴りと揺れを感じ、緊急マニュアルどおり、管理事務所から洞内に連絡をとり、洞内案内係の者2名と洞外の職員が出口、入口からお客様の誘導に向かったわけですが、幸いお客様2組は洞出口付近まで見学が終了しており、すぐに洞外まで誘導することができました。お客様、案内係とも怪我なく無事に洞外へ避難できたわけです。その後は大きな余震がたてつづけに起きていたため、安全を考慮して洞内には1週間ほど職員も確認の入洞を控えておりました。その後の確認で鍾乳洞内は全く被害がなかったことが確認され職員一同安堵しておりましたが、主要市道の亀裂・陥没・落石、敷地内のアスファルト面の亀裂、入口までの通路の亀裂、側面の石垣崩壊と崩れなどの影響で仮復旧する平成23年4月28日まで約1か月半の期間、休園を余儀なくされました。



東日本大震災により地割れが発生した道路

また、震災直後に起こった「原発事故」に関しましては、震災翌日から敷地内などの補修作業などを行っていましたが、3月15日に原発が爆発をおこす状態とのことで15日から21日までの約1週間、職員を自宅待機とし、数名が管理事務所で問い合わせの対応や予約のキャンセルなどの対応に追われました。またガソリン不足の為、その後も職員は乗り合わせなどでの出勤を余儀なくされました。

オープン以来、初めての休業となり、平成23年4月29日によりやく再オープ

ンにこぎつけることができましたが、平成23年度の入洞者が前年度対比で83%減の5万3千人と厳しい状況でありました。来洞される方は福島県内の方が大半をしめ、22年度まで大半を占めていた関東圏のお客様は全体の1割か2割程度となっております。特に団体客の大幅減少と関東地区からの学校団体の減少が著しく、来洞されない理由を旅行業者様や学校関係者にお聴きすると地震影響より放射能問題を危惧されており、放射能問題の早い解決を望んでおりました。

またあぶくま洞は福島原発1号機から約35kmの場所にあり、田村市都路町が避難準備区域に入っていたためマスコミ等で「田村市」と名前が出るだけで観光には大きな影響があり大地震でも崩れることのなかった福島県が誇れる観光地、あぶくま洞が原発事故により、多くのお客様に感動をあたえられなくなってしまったことが当時はとても残念でなりませんでした。この原発事故問題は継続して入洞者に影響を及ぼし平成30年の入洞者数は20万人まで増加しましたが、震災前の65%までの回復にとどまり、その後の令和元年の台風19号での市道土砂崩れでの休業やコロナ禍の影響などを乗り越えましたが、令和6年度の入洞者数は19万2千人の入洞者となっております。

〈見どころ〉

あぶくま洞の特徴として、天井から垂れ下がる鍾乳石やつらら石、床から延びる巨大な石筍を始め、複合型フローストンや石柱、シールドなど様々な鍾乳石が観察できるなど鍾乳石の種類と数が豊富であり、公開部分には太古からの水流による溶食跡や水流の流れで運ばれた礫層が天井や壁面で観察できます。



光が透けるほど薄く成長した鍾乳石

又洞内は上層部、中層部、下層部と3層に分かれている点や、石灰岩が中生代白亜紀頃に大規模な花崗岩の貫入があり熱変成を受けたため石灰岩が大きな結晶を持つ結晶質石灰岩（大理石）であることなど見どころが豊富な鍾乳洞です。鍾乳洞内の気温は年間を通して15℃ほどであり、夏は涼しく感じられ冬は暖かく感じられることを利用して、毎年冬季には鍾乳洞内最大のホール「滝根御殿」と呼ばれるエリアにて鍾乳洞内コンサートを開催しております。洞内は天然の音響効果が抜群であり演奏者はじめ観客のみならずさまから好評をいただいております。又もともと阿武隈山地にある田村市の周辺は北上山地とともに隆起して陸地となつて以来、一度も沈降して海になったことのない日本でも最も古い陸地だと言われており、日本で一番古い石灰岩に形成された鍾乳洞ではないかとも言われております。日本3大鍾乳洞には含まれておりませんが、観光洞の中で鍾乳石を間近で数多く観察できる鍾乳洞として、日本3大鍾乳洞に入ってもおかしくない鍾乳洞だと自負しております。

鍾乳洞は大自然が作り上げた造形美であり、見学するルートの変更や展示物の変更などは容易にできない博物館です。現状のルートのまま継続してお客様に満足いただき感動していただくにはどうしたらよいか、洞内の環境保全とともに日々考えております。ぜひみなさまも機会がございましたら一度、地底の神秘の世界にお越しください。お待ちしております。